上三川 この日なんの日

烏山城主成田氏宗亡くなる。〈1622（元和8）年11月7日〉

鎌倉時代から戦国時代の終わりまで、上三川町は宇都宮氏一族が築いた上三川城と多功城の領域でしたが、1597（慶長2）年に宇都宮氏が後継者を巡る一族の争いによって改易されると、豊臣秀吉によって宇都宮城代に命ぜられた浅野長政が管理する領地となりましたが、その後新たな領主が現れます。

1600（慶長5）年に起きた関ヶ原の戦いの際に、烏山城主であった成田長忠（おさただ）は、徳川家康方について、石田三成方の会津若松城主上杉景勝の南下に備え守備を固めるなどして、影から徳川家康の力となりました。結果は皆さんご存知の通り、徳川家康が率いる東軍が圧勝し、天下は徳川家康のものになったのでした。この時、長忠は働きが認められ、烏山二万石の所領に加え、新たに一万七千石の領地を与えられましたが、この内の一万石は上三川地区と明治地区にまたがるもので、成田氏が新たな領主となり上三川の江戸時代が始まったのでした。

しかし、この後成田氏には過酷な運命が待ち受けていました。長忠は、長男の重長（しげなが）に家督を譲り隠居しましたが、重長は病弱なため、弟の氏宗（うじむね）に職務を代行させました。しかし、1603（慶長8）年に重長が亡くなると、成田氏の家中では家督を巡って、奥方のおなかの中にいる亡くなった重長の子供を推す一派と、氏宗を推す一派が対立し、紛争がおきました。このことは、幕府にも伝わり、家政不取締りであるとのことから、一万七千石の領地が減らされてしまいました。そして、1622（元和8）年11月7日に跡を継いだ氏宗が亡くなると、再び世継ぎ争いが起こり、領地は没収され、成田氏は断絶したのでした。

普門寺に残されている成田長忠寄進の駕籠

上三川における成田氏の治世は、東館近辺に置かれた陣屋で行なわれていたとされ、その期間は領地が減らされた1603年までの3年間とも、お家断絶までの22年間とも言われており、いずれにしろ短い期間であったためか、それを伝える史料は少なく、長忠が普門寺の住職に寄進した駕籠が、上三川における成田氏の治世を伝えるものとして残されています。

広報短歌

居並べるよそゆき顔の顔と顔
　シャッター音は静寂（しじま）を切りぬ　高田　幸子

震えつつマイクをしかと握りしめ
　三分間のドラマに挑む　小島　キミ

調理なす酒一さじの匂いやに
　好みし人のほろとたちくる　沢谷　郁子

親のあと鳴きて飛びゆく子鴉の
　羽つやめくも幼さのこる　斉藤アツ子

川土手の茂みにやわらかむ葛の葉の
　陰に花穂の紅く恥ぢらふ　稲葉　敬子

廃線の鉄路黙して赤錆の
　レールは濃霧の山に入りゆく　武藤　ひさ

ふっくらと櫛の目通る母の髪
　着物姿のまなうらにあり　高橋ツギ子

脱け殻と骸（むくろ）の蝉を見る庭に
　枯葉目立ちて日暮れ迫りく　菊池　美代

村社（やしろ）前に夫婦の銀杏あり
　茂みの下で涼を楽しむ　井沢　和江